

コミュニケーション活動の意欲を高める自己評価の工夫 ～小中連携を考慮したCan-do cardを通して～

那覇市立上山中学校教諭 松尾 望

I テーマ設定理由

インターネットや携帯電話の普及も手伝って、急速な国際化時代を迎えた今日、我々は国際社会の一員としての自覚を持って行動することが求められている。それに伴い、日本の英語教育のあり方も変化しつつあり、平成14年『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想（文部科学省）が作成され、少人数指導や構造改革特区などによる英語教育が開始された。また、平成19年3月の時点で小学校英語はすでに全国公立小の95.8%で行われており、中央教育審議会の外国語専門部会は、小学校5年生からの必修化を提言している。

那覇市では平成15年度より市内全小学校・中学校が研究開発学校の指定を受け、授業形態や小中連携について研究を進めている。小学校においては、英語を「聞くこと」「話すこと」に慣れ親しみ、英語に対する興味・関心を高める授業実践を行っており、中学校でも音声によるコミュニケーション能力の育成を重視しつつ、「読むこと」「書くこと」を加えた4領域の言語活動を一層充実させる取り組みを続けている。

本校の現状をふりかえると、小学校で英語活動を楽しく体験してきた子どもたちが、中学校では自信を持って発話をすることができない場面や、英語を積極的に使おうとする意欲が低い様子が見えてきた。その原因の一つとして、英語授業の到達目標を生徒にわかりやすく提示していなかったことがあげられる。そのため、生徒は自分がどんなことをできるようになったのか、これから何を学習していくのかがわかっていなかったと思われる。

この点を改善していくためには、小中での英語活動の流れを考慮した到達目標を立て、それを生徒に明示するとともに、生徒の実態に合った評価方法を工夫する必要がある。そこで、小中学校の到達目標を配列した自己評価表(Can-do card)の開発と、それを使った授業実践をすることを発案した。この自己評価表で生徒自身が何を努力したらよいのかがわかれば、一人ひとりが意欲的に英語活動に取り組み、自信を持って積極的にコミュニケーションすることができるのではないかと考え、本研究テーマを設定した。

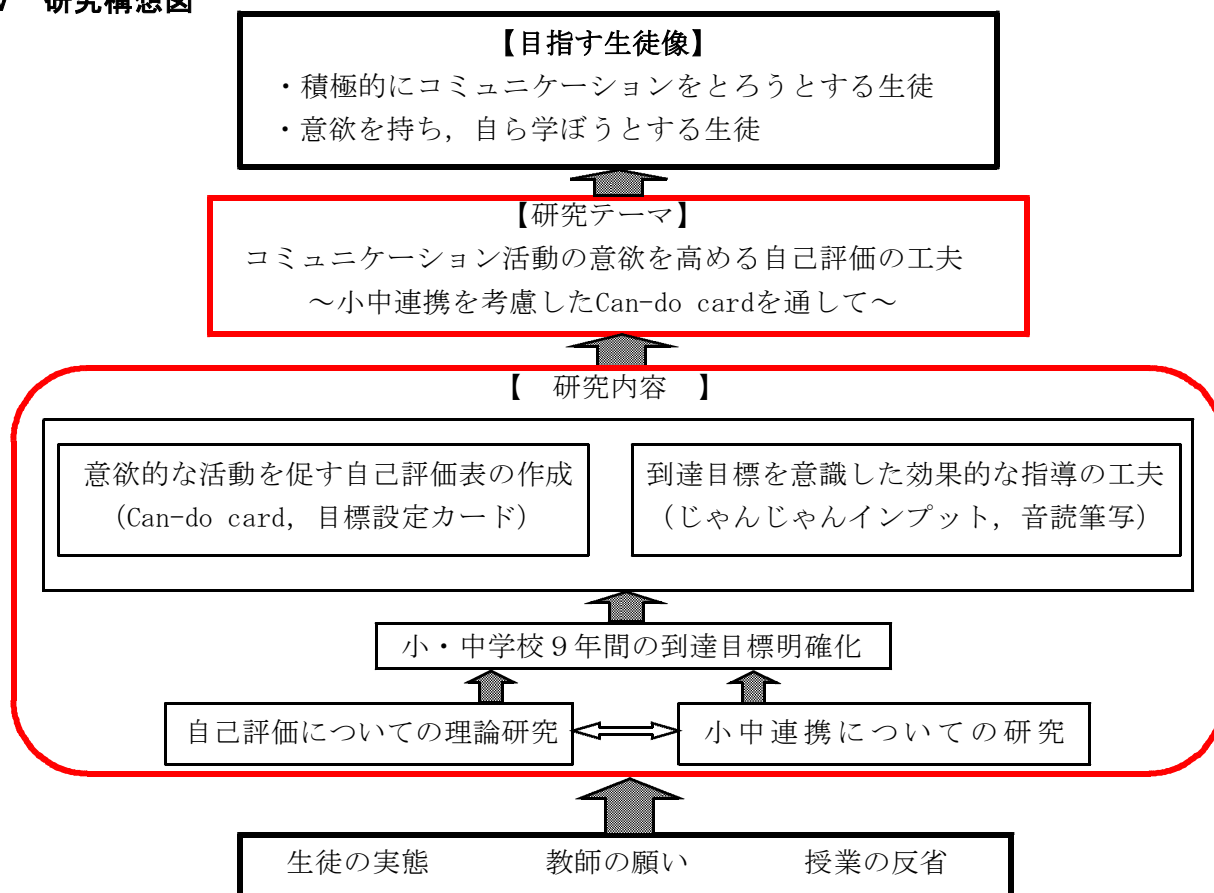
II 研究目標

自己評価活動において、場面学習の前後にCan-do cardを、授業の前後に目標設定カードを活用することで、活動意欲及びコミュニケーション能力の向上を目指す。

III 研究方針

- 1 自己評価に関する理論研究
- 2 小中連携についての研究
- 3 自己評価表（Can-do card, 目標設定カード）の作成と、それを活用した授業の工夫改善

Ⅳ 研究構想図



Ⅴ 研究内容

1 自己評価について

(1) 自己評価の意義

自己評価活動は、自分を見つめ直し、何の学習に力を入れたらよいかを確認したり、以前の自分に比べてどれくらい伸びたかを知り自信をつけることができる。「新・教育評価法総説（下巻）」（橋本重治著）には、自己評価の意義について「教育評価の最も重要な価値は児童生徒の学習の改善と向上にあるのであるが、学習を改善し向上させるかどうかは結局は生徒自身の問題であって、教師の行う評価はこれに対して間接的影響をもつに過ぎないのに対し、生徒の自己評価こそが一層直接的効果を発揮する」とある。つまり自己評価は、教師による評価の補助的な役割をなすだけでなく、それ自体が独立して生徒の学習の改善と向上に役立つのである。

自己評価の効果的・積極的な活用は、生徒自身が学習目標に向かって自分の取り組みをうまく軌道修正し、さらに伸びるためにはどうすればよいかを考えるきっかけになる。

(2) 効果的な自己評価活動の段階

授業において効果的な自己評価活動が行われるためには、学習過程に応じた段階的な編成をする必要がある（図1）。すなわち、「現在の自分を見つめる」ことのみに着目するのではなく、その前提としての学習目標の設定や、自己評価を活かしてさらなる発展ができるように考えることが大切である。本研究では、図1に示す自己評価活動の8つの段階をA、Bの2つ部分に分け、Aの部分は**目標設定カード**、Bの部分は**Can-do card**という2つの自己評価表を作成し、活用していきたい。

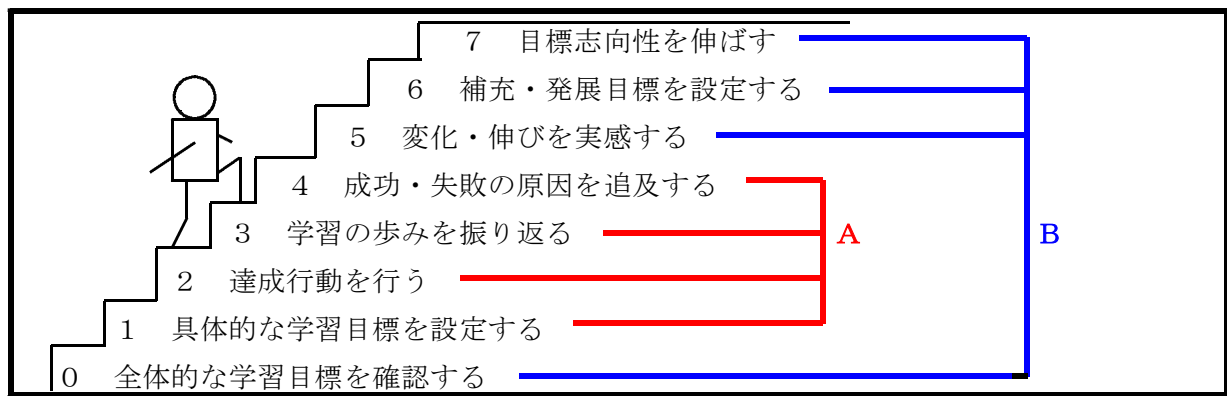


図1 自己評価活動の段階 (出典:「楽しい英語授業を演出する評価活動」長瀬壮一著)

(3) 自己評価におけるPDCA

指導と評価の一体化のための一連の流れは、PDCA《P l a n (計画)→D o (実践)→C h e c k (点検評価)→A c t i o n (見直し・改善)》と表現される。これは教師の指導工夫改善の手法であるが、(2)の図1で表したAの部分の段階とも共通する。この流れを自己評価に取り入れ、生徒自身が自分の学習活動に対してPDCAを実行することにより、学習に対する成就感や自己肯定感を持たすことができるばかりでなく、自身の学習を自己管理できる能力が身に付いてくるのではないかと考える。本研究における授業実践では、自己評価においてこのPDCAが効果的に行われるよう工夫していきたい。

2 小中連携について

那覇市における小中学校が連携することのねらいは、小学校で培った英語活動への積極的な態度を継続しつつ、英語を理解・表現するための実践的コミュニケーション能力を中学校でさらに伸ばすことである。そのためには、小中9年間でひとつのまとまりとして捉え、義務教育で子どもが身につけるべき資質・能力の最終到達目標の設定と、それに到達するためのカリキュラム作りが大切である。本市の第4年次研究開発学校研究課題としても「小中連携した英語教育について」「小中学校9年間を見通したカリキュラムの開発」をあげている。小中連携カリキュラム

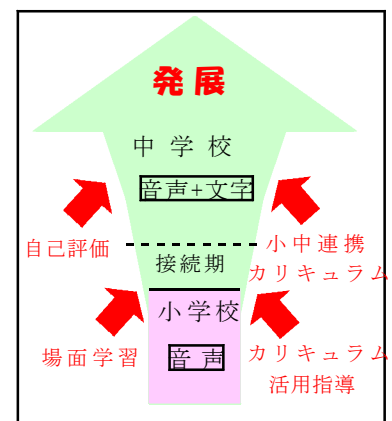


図2 小中連携イメージ図

の作成と、それを活かした指導法の開発は、小学校から英語活動を経験している生徒の可能性を発展・拡大する原動力となる。(図2)

また、小学校の英語活動を活かす指導方法として、言語の使用場面ごとに言語活動を構築することが有効と考える。なぜなら、本市の「平成16年度小学校英語科指導計画」では、言語の使用場面を基盤として作られているため、その流れを継続させることができるからである。さらに、「中学校学習指導要領 外国語 (2) 言語活動の取扱い」には「コミュニケーションを図る活動においては、具体的な場面や状況に合った適切な表現を自ら考えて言語活動ができるようにすること」とあり、言語の使用場面の例として、「あいさつ」「自己紹介」「買い物」「電話での応答」など7つがあげられている。

そこで本研究では、この中から「電話での応答」を選び、それについての小中9年間の言語材料を系統化し、段階的な到達目標と最終到達目標を明確にする。次に到達目標を自己評価に取り入れ、それを活かした指導法を工夫していくこととする。

3 活動やワークシートの工夫

(1) Can-do card (電話編)

①特徴

小中連携を考慮し、小学校から中学3年間の電話での応答に関する到達目標を下から上に並べ、最終目標「電話で用事をすますことができる」を設定した自己評価シート。(2)で紹介する「じゃんじゃんインプット (電話編)」の言語材料を基にして作られている。このシートにおいては、「到達目標や自分の力を知り、目的意識を高める」「学習後の伸びを実感し、活動意欲の向上につなげる」という2つの目的がある。(表1)

②活動内容

電話での会話の題材を学習する前と、学習を終えた後の合計2回使う。自分ができることをチェックボックスに印を入れ、右上にそれぞれのチェック印の合計数を書く。

※1 中村(2006)による先行研究を参考に作成

表1 Can-do card (電話編)

Can-do card		☐の数 合計
Class : No : Name :		1回目
		2回目

5. 電話での会話

究極の目標：電話で用事をすますことができる

レベル

中学2・3年

中学1年

小学校

6

☐ 相手に、しばらく待ってもらうように伝えられる

☐ 本人が不在であることを伝えられる

☐ 伝言をおねがいすることができる

☐ 伝言が必要かどうか、相手にたずねることができる

☐ 後でかけ直すことを伝えられる

☐ まちがい電話であることを伝えられる

5

☐ 相手を何かにさそうことができる

☐ さそいにのったり、ことわたりすることができる

4

☐ 相手がなにをしているか、たずねることができる

☐ 自分が今なにをしているかをつたえることができる

3

☐ 電話で自分の名前を名のることができる

☐ 電話で相手呼び出すことができる

☐ 自分が話していることを伝えられる

2

☐ 電話番号をたずねることができる

☐ 電話番号をたずねられたら、自分の番号を伝えられる

1

☐ 数字の0～9それぞれを聞いて理解することができる

☐ 数字の0～9それぞれを言うことができる

(2) じゃんじゃんインプット (電話編)

①特徴

「聞く・話す」領域の力を伸ばすことを目的としている生徒用小中連携カリキュラムであり、小中9年間の言語材料を系統化して入れてある。ペア同士で会話を練習し、できるようになったかを互いにチェックしあいながら、上のレベルを目指す活動を行う。レベルは(1)で紹介したCan-do cardの到達目標に合わせており、生徒は自分の学習進度に合わせて会話練習ができる。これを使えばCan-do cardで示された到達目標を習得するための具体的な活動となる。(表2)

②活動内容

毎回の授業(5分～10分程度)で使う。ペアで暗唱ができることを目標とし、できたら上のレベルに進む。暗唱できたら、Can-do cardの該当するレベルの到達目標ができるようになったこととする。

表2 じゃんじゃんインプット (電話編)

じゃんじゃんインプット		Class :	No.	Name
◎ すらすら読めたら○、暗唱できたら●をつけましょ				
レベル	English Sentences	ノート		
1	0～9までを言う 0～9を聞いて理解できる			
2	A: What's your phone number? B: I t' s _____			
3	A: Hello. This is (A). Can I speak to (B), please? B: This is (B) speaking.			
4	A: What are you doing now? B: I am (watching TV). 〆()を付けてよ。			
5	A: Let's (go to the bookstore). B: (Yes, let's / Sure / Sorry, I'm sick.)			
6	A: Hello. Is your mother home? B: Just a minute, please. I'm sorry, she is out. A: Can I leave a message? B: Sure. A: Hello. Is your brother home? B: I'm sorry, he is out. Would you like to leave a message? A: No. I'll call back later. B: I see. Bye. A: Hello.			

(3) 目標設定カード

①特徴

Can-do cardが場面学習の前後だけで使うのに対し、毎回の授業で自らが何を学ぶことができたのかをふりかえり、次につなぐことができるような自己評価表である。教師が目標を提示するのではなく、自らで目標を設定(Plan)し、活動(Do)後に実際どれくらいできるようになったかを自己判断(Check)し、それをふまえて今後の改善(Action)を行う。このPDCAが生徒自身で主体的にできるようになることを目的としている。右側に教師がコメントを書くことにより、生徒に励みを持たせる。(表3)

②活動内容

毎回の授業の最初と最後で使う。「できるようになりたいこと」には、「聞く・話す」の領域と「書く」の領域についてじゃんじゃんインプットの英文レベルを記入し、本時の目標とする。授業後に達成できたかどうか、次の授業ではどのように努力するかを記入する。達成できたかどうかの判断は、「聞く・話す」の領域については「じゃんじゃんインプット（電話編）」を使っのペアでの会話活動で行い、「書く」領域については、「音読筆写と書き取り」《後述(4)参照》の中の書き取りテストで行う。

表3 目標設定カード

目 標 設 定 カ ー ド				
Class:		No.	Name:	
Date	今日の授業で できるようになり たいこと	今日の授業で できるようになった こと	今日の授業を ふりかえって	先生より
	「聞く」「話す」 レベル () ずらずら着る Plan	Check じゃんじゃんインプットにある 英文レベルを目標とする。	Action	

(4) 音読筆写と書き取り

①特徴

じゃんじゃんインプットを用いた活動が「聞く・話す」力を高めるものであるのに対し、こちらは基礎的な「書く」力の定着を目的としている。じゃんじゃんインプット中の、あるレベルの英文をテスト範囲として知らせ、生徒はそこからまだ書けないものを選んで、指定の時間内にできるだけ早く正確に何度も書いて覚える。このとき、英文の読みがまだ不安な生徒は、声を出し読み上げながら書くようにする。直後に書き取りテスト（ディクテーションテスト）を行うので、覚えた英文をかなり正確に書くことができ、自信につながる。また、単語1つを1点と数えて採点させるので、多く点数が取れ、満足できる結果が得られる可能性が高い。

②活動内容

ディクテーションテストを行う英文（2～3文）がどれであるか（どのレベルであるか）をまず伝える。生徒はその英文の中から練習したいものを選び、タイムを計って用紙に1～2分書く練習をする。直後にその用紙を裏返し、教師が先ほど伝えた英文を読み上げ、それを書き取るテストを行い、終了後自己採点する。このとき英文単位でなく、1つの単語ごとに採点をするように指示する。

4 活動の流れ

図3は、場面学習全体の活動の流れである。Can-do card、目標設定カード、じゃんじゃんインプットは互いに連携して使い、「書くこと」に関しては前に述べたように「音読筆写と書き取り」活動を行ってスキルアップを目指す。

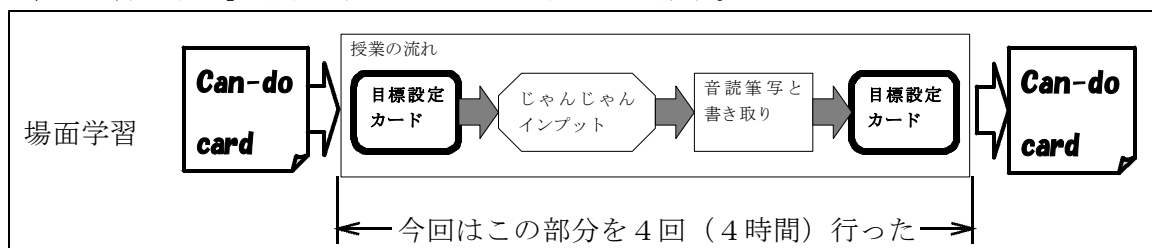


図3 場面学習全体の流れ

VI 授業実践

1 題材名 電話での会話 (中学1年)

2 評価規準

コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	言語や 文化についての 知識・理解
①既習の表現を使って意欲的にコミュニケーションをとろうとしている ②まとまりを恐れず、スキット作りを楽しんでいる ③授業をふりかえり、次の目標を設定して向上しようとする	①電話でよく使われる英語を用いて、応答することができる ②電話でよく使われる英語を書くことができる	①会話の中で、相手の言っていることを正しく理解し反応することができる ②大切な部分を的確に聞き取り、理解することができる	①電話における各場面での表現について知っている ②現在進行形の文の構造を知っている

3 指導計画

時 間	目 標	言 語 活 動	評価規準との関連				評価方法
			関 意	表 現	理 解	知 理	
事前	・場面学習全体の学習過程を知る ・「電話の応答」についての到達目標や、現在の自分の到達状況を知る	・Can-do card記入 ・プレリスニングテスト実施 ・プレアンケート実施					
1	・数字の0～9、電話番号のたずね方答え方を知る ・電話で名前を伝えたり、話をしたい人を呼び出すことができる	・目標設定カード記入 ・じゃんじゃんインプットの導入 ・生徒代表を相手に電話の会話を行う ・音読筆写と書き取り ・目標設定カード記入			①		・行動観察 ・目標設定カード
2	・現在進行形の文型と表現方法を知る ・現在進行形で簡単な表現ができる EX I am playing soccer. ・電話でのやりとりで、現在進行形を使って表現ができる	・目標設定カード記入 ・じゃんじゃんインプット会話活動 ・インタビュー形式での会話活動 ・パターンプラクティス (What are you doing? → I am ～.) ・電話の会話 スキットづくり ・音読筆写と書き取り ・目標設定カード記入		② ③			・行動観察 ・ワークシート (スキットづくり) ・目標設定カード
3	・電話で相手を誘ったり、それに答えたりすることができる ・電話の会話の中で、進行形や Let's ～などを使うことができる	・目標設定カード記入 ・じゃんじゃんインプット会話練習 ・電話での会話 スキットづくり ・スキットペア練習 ・音読筆写と書き取り ・目標設定カード記入		② ③			・ワークシート (スキットづくり) ・行動観察 ・目標設定カード
4 本時	・電話でのスキットをやりとりできる ・電話での英語表現を書くことができる ・自分のできるようになったこと、これから努力することをふりかえる	・目標設定カード記入 ・じゃんじゃんインプット会話練習 ・作ったスキットで電話の会話を行う ・音読筆写と書き取り ・目標設定カード記入	① ③	②			・ワークシート(じゃんじゃんインプット、スキット作り) ・音読筆写と書き取り ・目標設定カード
5	・電話の場面の会話を聞き取れる ・簡単な表現を使って、電話での応答をやりとりできる ・自己をふりかえり、伸びを実感する	・ポストリスニングテスト実施 ・電話での会話実践(インタビューテスト実施) ・ポストアンケート実施 ・Can-do card記入	③	①	②		・ポストテスト ・インタビュー ・目標設定カード ・Can-do card

4 本時の学習

(1) 本時の指導目標

- ①現在進行形やLet's～.の文を用いながら、電話での応答ができる。
- ②電話の表現を書くことができる。
- ③個人の目標を立てて英語活動を行い、自分がどれくらいできるようになったかをふりかえって、次につなげることができる。

(2) 授業仮説

電話での言語活動において、目標設定カードとじゃんじゃんインプット（小中連携カリキュラム）を活用すれば、目標に向かって意欲的に活動に取り組むであろう。

(3) 本時の展開（対象：中学1年 少人数クラス 計23名）

指導の流れ	生徒の活動	形態	教師の支援	留意点・評価(★)
Aiming (5分) Plan	・目標設定カードの「今日できるようにしたいこと」を記入し、「聞く・話す」「書く」領域の目標を確認する	全体 個人	・これまでの目標設定とその達成状況について話し、生徒ががんばっているところをほめる ・自分の目標をカードに反映できるように、じゃんじゃんインプットや音読筆写の活動を思い出すよう支援する	・目標設定カード準備
Greetings (1分)	・挨拶をする	全体	・既習の表現を使い挨拶をする	・テンボ良く行う
Review (3分)	・「現在進行形」チャンツのリズムに乗って言う練習をする "I am ~ing"	全体	・ピクチャーカードを指しながら、"What are you doing now?"とたずね、リズムに乗って現在進行形で答えられるよう支援する	・ピクチャーカード、チャンツCD準備
Main activities (31分) Do	・モデル会話を聞く(2分)	全体	・教師とゲストとで会話をする ・着信音を使うなど興味を持たせる	・ゲストに頼んでおく
	・じゃんじゃんインプット(会話練習)(3分)	全体 ペア	・じゃんじゃんインプットレベル3～5までをリピート練習 ・机間指導で発音や進度の支援を行う	・じゃんじゃんワークシート準備
	・スキット練習(3分)	全体 ペア	・スキットのリピートを行う ・机間指導で発音や進度の支援を行う	・スキットのワークシート
	・インタビュー形式電話時間内にできるだけたくさんの人と会話をする ・スキット発表(8分)	個人 個人	・ルールの説明をする(4分間に5名以上) ・動きが遅い生徒への支援をする ・ゲストの方々にも協力依頼する ・できるだけ暗唱できるよう促す	★関心・意欲・態度① ・一人一人の会話を聞き支援する
	・外国人と電話で会話 ・覚えたスキットを使う(5分)	個人	・外国人に携帯で電話をかける ・終わった後、会話の内容や感想を聞く	★関心・意欲・態度①
	・音読筆写(writing practice) ・教師が読んだ英語を書き取る(10分)	個人	・各自の目標を確認させる ・音読筆写の用紙を使って2分間writingの練習に集中できるように支援する ・書き取りの英語は、ゆっくり2回読む ・答え合わせは単語1つを1点とする ・点数がたくさん取れていたらほめる	・音読筆写ワークシート準備 ★表現②
Consolidation (10分) Check Action	・目標設定カードの「今日できるようになったこと」を記入し、目標に対してどれだけできたかを自己判断する ・目標設定カードの「今日の授業をふりかえって」を記入し、今後何に力を入れたらよいかを考える(9分)	個人	・授業の前に立てた目標が達成できたか、授業の活動が充実していたかをふりかえらせる ・達成できた生徒をほめる ・授業の感想を聞く	・目標設定カード準備 ・フィードバックを行う
	(1分)	全体	・次時予告をする ・終わりの挨拶	



VII 結果と考察

1 検証1

授業の始まりと終わりで「目標設定カード」を使い、個人で目標を設定しそれをチェックすることで、授業での意識が高まり意欲的に活動するようになるであろう。

【手立て】

カードに書かれている内容と、事後アンケートの結果から検証する。

【結果1】

図4は、生徒の最終目標における達成感を、授業のふりかえりの記述から読みとり、グラフ化したものである。

ほとんど全員の生徒が「聞く・話す」「書く」の領域で最終目標に到達できたという満足感を感じていることがわかる。「聞く・話す」領域で、自分の立てた目標がまだ達成できていないと感じている生徒（9％）は、最終目標を最も高いレベル6（中学2年・3年レベル）としていた。

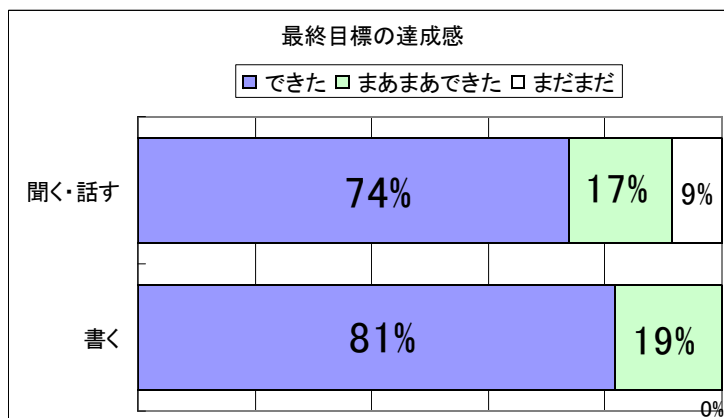


図4 目標をどれぐらい達成できたか

【結果2】

図5は、事後アンケートにおける設問「目標設定カードは役に立ちましたか？」の結果である。81％の生徒が「はい」「どちらかといえばはい」と答えている。しかし、19％の生徒が「どちらかといえばいいえ」と答えている。「いいえ」と答えた生徒はいない。

さらに3つの答えの理由を分類し、まとめたものが表4である。これによると、自分で目標を立ててそれを意識することが、生徒の活動意欲向上につながっている様子がわかる。また、目標を立てたことを忘れてしまい、意識することができなかった生徒もいる。

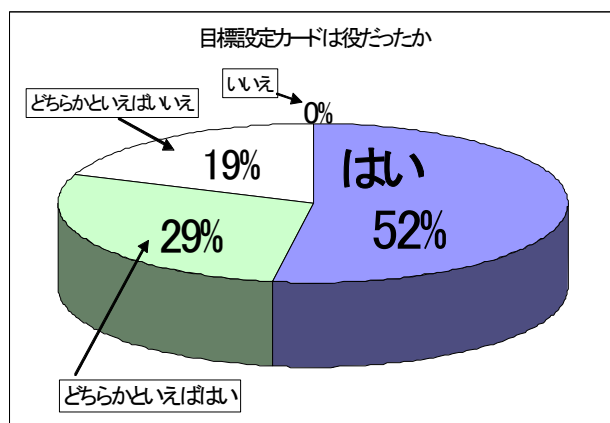


図5 目標設定カードのアンケート結果

表4 答えた理由

「はい」と答えた生徒の理由	
・	最初で目標を立てていれば、最初からやる気がでてとてもよい。
・	どのくらいの英語を理解したいのかを自分自身あらためてわかる。どれくらいできたのかも分かるから。
・	自分が今日の授業でどれくらい分かったかを調べられるし、次の目標を立てて、「がんばろう！」という気持ちになるから。
「どちらかといえばはい」と答えた生徒の理由	
・	目標を立てておけば、つぎががんばることが分かるから良いと思う。
・	授業のとき、ときどき目標を忘れていた。
・	たぶん、どんどんレベルがあがったんじゃない？先生からのコメントが楽しかった！！
「どちらかといえばいいえ」と答えた生徒の理由	
・	ほかのことしてたら、目標のこと忘れる。
・	なんか、めんどくさい。

【考察】

結果1より、大半の生徒が自分の最終的な目標を達成したと感じていた。ここで、生徒が目標としてカードに設定したレベルをくわしく見てみると、「聞く・話す」領域で91%、「書く」領域で83%がレベル5（中学1年程度）以上であった。これは、今回の授業の指導目標でもある。生徒がこのレベルまで目標を上げていき、それを達成できたと感じることができたのは、4回のカードの使用による生徒自身のPDCAがうまくいったからであると捉えられる。また結果2より、目標設定カードを使うことが生徒の活動意欲向上や積極的コミュニケーション活動につながっていくということが認められる。

さらに、このカードの4回の記述内容を見てみると、PDCAを繰り返す過程で、「見ないでもすらすらと言えるようになりたい」「書けるようにもなった。他もがんばる」など前向きの変容がはっきり表れている。特に最後（4回目）の授業のふりかえりでは、全員の生徒が課題を発見したり、できるようになったことを認識していた。

これらのことから、生徒の主体性や自己判断力を育て、学習に対する心構えを良い方に変え、意欲的な活動を促進するという目標設定カードの目的は達成されたといえる。しかし、目標を十分に意識せず活動する生徒がいたこともアンケートから明らかになった。教師からの目標喚起のアプローチを意図的に行うことにより、1回1回の目標達成が題材全体の目標（Can-do cardに記されている到達目標）達成につながることを、生徒が理解できるのではないかと考える。

2 検証2

場面学習の前後において、Can-do cardを使い、生徒自身何ができるようになったのか、どれぐらい伸びたかがわかれば、自信を持ち意欲的に活動するようになるであろう。

【手立て】

場面学習前後（2回）のCan-do cardにおける☑（チェック印：できるようになったこと）の数の変移や、生徒がCan-do cardをどのように受けとめたのかをアンケートから検証する。

【結果1】

表5は、各生徒のCan-do card（電話編）における1回目（授業前）と2回目（第5時終了後）の☑の数の変移と人数を表したものである。これによると、授業前に比べて授業後はできるようになった項目（各レベルの到達目標）が、全員4つ以上増えている。

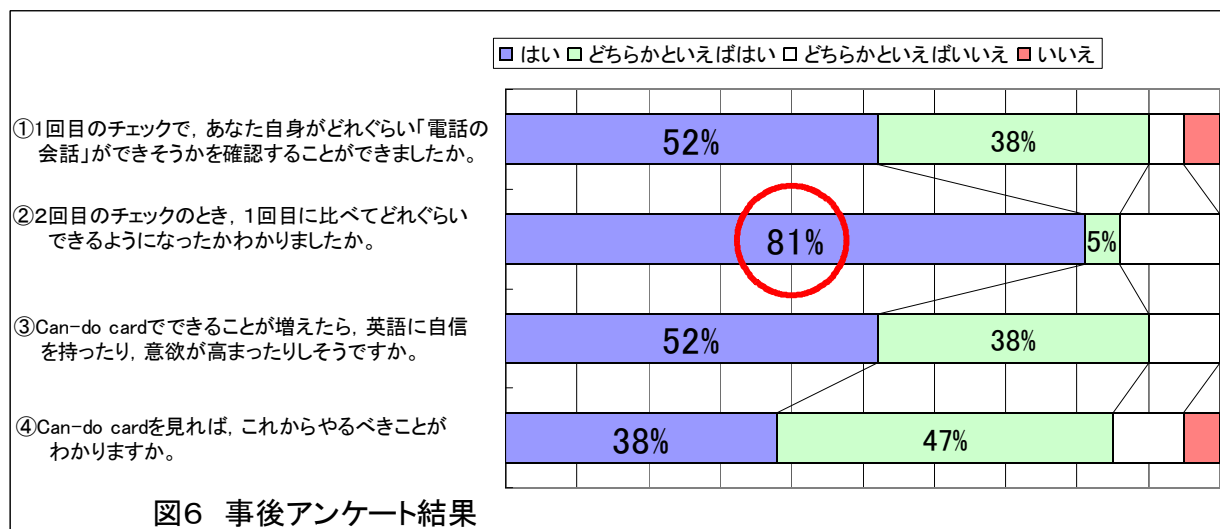
さらにその中で、7つ以上増えている生徒が全体の59%を占めている。これらの生徒は、授業前に比べて授業後2～3段階レベルが向上し、かつ全員がレベル5以上に到達している。

表5 増えたチェック印と人数

増えたチェック印	人数(割合)
4つ	3人(14%)
5つ	4人(18%)
6つ	2人(9%)
7つ	5人(23%)
8つ	4人(18%)
9つ	4人(18%)

【結果 2】

図 6 は、Can-do cardの機能について検証した結果である。これによると①～④の設問に対し、80%～90%の生徒が「はい」「どちらかといえばはい」と答えていることから、Can-do cardは概ね機能を果たしているといえる。特に、②の設問では、他の設問に比べると「はい」の割合が80%を超えていることから、生徒に伸びを自覚させることについてがよく機能していたといえる。



【結果 3】

生徒の記述式アンケート「Can-do cardを使ってみて感じたこと」の内容を分析すると、Can-do cardの目的別に分類することができた（表 6）。①の目的に関連する感想を書いた生徒にとってCan-do cardは、自分を知り目的意識を高めるのに役立ったと思われる。また、②の目的に関連する感想を書いた生徒は、伸びを実感し意欲や自信が高まったと推定される。これらの意見が全体に占める割合は81%であった。これに対し、その他の感想を書いた生徒も数名おり、全体に占める割合は19%であった。

表 6 アンケートの分類表

Can-do card の目的	「①到達目標や自分の力を知り、目的意識を高める」	「②学習後の伸びを実感し、活動意欲の向上につなげる」	(その他)
意見・感想の内容	- 電話での会話で必要なことがわかった。 - これから2年、3年でやることがわかった。自分のレベルがわかった。 - 自分のできる部分がわかった。少し楽しい！ - Can-do cardで、英語に意識を持つことができた	- はじめはレベル2か3しかできなかったけど、レベル6まで言えるようになったのでうれしかったし、それをつかうことができたらいいなと思った。 - 最初は自信なかったけど、ちょっと自信ついた！ - Can-do cardの1回目の時は、6個しかできたしかなかったけど、何回も練習して、12個もできるようになったからうれしかった。 - 自分にとっても役に立ったと思います。 - とても良く、これからの授業であってほしいと思った。	- 特に感じなかったけど、できるようになったかな。 - あんまり楽しくなかった。 - さあ・・・。
割合	81%		19%

【考察】

結果1～結果3から、Can-do cardを使ったことで生徒が到達目標を理解し、変容や伸びを実感でき、以前よりも自信を持ち意欲的に活動するようになったことがわかる。

Can-do card（電話編）の特徴の1つとして、中学1年レベルの到達目標に限定することなく、電話の応答における小中9年間という長いスパンの到達目標を系統立てて配置したことがあげられる。これにより、個々の生徒は自分の能力に合わせて活動と評価を行うことができ、結果1に示したように全ての生徒ができるようになった項目を増やせた。このことは、小中連携カリキュラム「じゃんじゃんインプット」の良さを活かして活動し、さらにそれをCan-do cardで評価に結びつけることができた結果でもあるといえる。

また、結果2、結果3より、大半の生徒は自分自身の英語学習状況の把握をし、場面授業の前後での進歩を確実に実感している。そして、自分の変容を前向きに捉え、「できる部分がわかった」「自信がついた」「実際に使えたらいいなあ」などの意見・感想を残しており、学習への自信になったり、意欲につながっている様子もはっきり見取ることができる。また、「特に感じなかったけど、できるようになったかな。」という生徒の実感からは、事前・検証授業の期間だけでなく、もっと長期的・継続的にこのCan-do cardを使用していくことにより、効果が高まってくることも考えられる。

課題としては、Can-do cardの使用がこの「電話での応答」場面（5時間）の前後1回ずつ、合計2回しかなかったため、生徒によっては印象が薄く、積極的なコミュニケーション活動に結びつけることが難しかった部分があった。生徒に伸びを印象づけるためには、毎回の授業で行う他の活動とうまく連動させ、それが最終的な到達目標「電話で用事をすますことができる」の達成につながることを意識させることが大切である。

今後は、電話だけでなく他の場面でのCan-do card作成や、各場面の到達目標を1枚にまとめた自己評価シートの開発が考えられ、小中連携カリキュラムの工夫改善と合わせて長期的に検証・考察していく必要がある。

3 検証3

Can-do cardや目標設定カードを使い、活動意欲が向上すれば、スキル面も向上しコミュニケーション能力が高まるであろう。

【結果1】

英検5～4級レベルのリスニング問題の中から、電話の会話場面の問題を含めた10題を抜粋し、1問1点の10点満点で行った。授業前（プレテスト）と授業後（ポストテスト）の結果による人数分布が図7である。

授業後には8点以上の生徒が全体の74%となり、5点以下の生徒がいなくなった。平均点も6.6点から8.3点と1.7点上昇した。

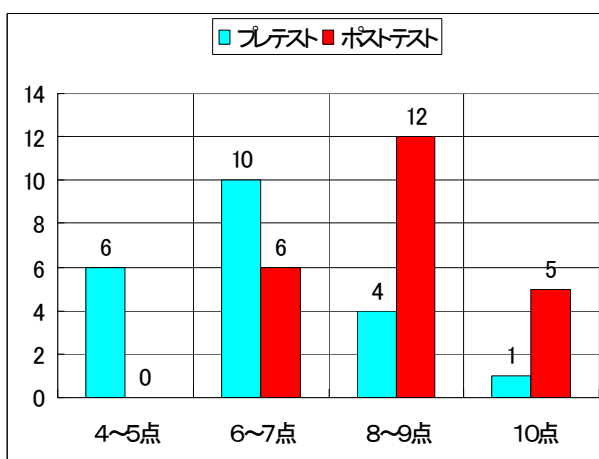


図7 プレ・ポストリスニングテストの人数分布

【結果 2】

「音読筆写と書き取り」活動の中でディクテーションテストを合計 4 回行った。表 7 は 1 回目と 4 回目の結果である。表中の「総単語数」は出題した英文の単語を合計した数で、この数字が満点となる。1 回目と 4 回目

表 7 ディクテーションテストの結果

	1 回目	4 回目
英文レベル	3	3, 4, 5
総単語数 (満点)	1 2	2 2
正答単語数の平均	1 1. 7	2 0. 4

の正答単語数の平均を比べると、4 回目までに 8. 7 個多く単語が書けるようになった。また、4 回のテストとも正答率は 9 0 % を超えていた。

【考察】

結果 1 より、「聞くこと」に関して活動意欲の高まりがスキルの向上に結びついたことがわかる。このことは、会話において相手の伝えようとしていることが理解できることにつながる。また、結果 2 より、「書くこと」に関するスキルも伸びていることがわかる。これは、単語を正しく書けたというだけでなく、教師の言った英文を正しく聞き取り、その英文を書くことで、語順など文の構造を理解することもできるようになってきたと捉えられる。

総じて言えば、Can-do card、目標設定カードによる自己評価の工夫がこれらのスキルを向上させ、実践的コミュニケーション能力を高めたと結論づけられる。

Ⅷ 成果と課題

1 成果

- (1) 毎回の授業において、目標設定カードでその時間の目標を立て、ふりかえることにより、生徒の授業への意識が高まり、活動意欲が向上した。
- (2) 電話での場面学習の前後において、Can-do card で到達目標を確認し、達成状況や学習後の伸びを実感することにより、自信を持ってコミュニケーション活動ができるようになった。
- (3) 自己評価・ペアワーク・筆写などの活動を工夫し連動させて行うことにより、特にリスニング力やライティング力が向上した。

2 課題

- (1) 他の場面における小中連携カリキュラム作成と、それを活用した指導法
- (2) 場面学習以外での自己評価の取り入れ方
- (3) 自己評価活動と言語活動の効果的な連動

《主な参考文献と引用文献》

「中学校学習指導要領 解説 ～外国語編～」	文部科学省 東京書籍	2 0 0 4
「新・教育評価法総説 (下巻)」	橋本重治著 金子書房	1 9 8 0
「楽しい英語授業を演出する評価活動」	長瀬壮一著 明治図書	1 9 9 4
「英会話月別 1 分間メニュー&生徒熱中ゲーム 3 3」	辰巳純子他著 明治図書	2 0 0 5
「平成 1 6 年度小学校英語科指導計画」	那覇市教育委員会	2 0 0 4
「研究開発実施報告書 第 4 年次」	那覇市教育委員会	2 0 0 6
「那覇市立教育研究所平成 1 8 年度前期研究報告書」	那覇市立教育研究所	2 0 0 6